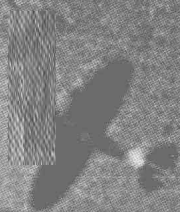


豊田 穰

ミッドウェー戦記



豊田 穰

ミッドウエー戦記

著者略歴

大正9年満州四平街生まれ。海軍兵学校卒。
海兵68期。現在、東京新聞社（中部日本新聞
兼務）勤務。昭和24年「帰還」で第1回横光
利一賞次席、26年「ニューカレドニア」「ミッ
ドウェー海戦」その他の業績で第1回岐阜県
文化賞、46年連作長編「長良川」で第64回直
木賞受賞。

ミッドウェー戦記

昭和四十八年一月三十日 第一刷

定価 六〇〇円

著者 豊田 穰

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

電話番号 東京(三)三六二二三

郵便番号 一〇二

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

万一落丁・乱丁の場合はおとりかえ致します

© JO TOYODA 1973 0093-302630-7384

Printed in Japan

ミッドウェー戦記

装
幀
養
老
正
也

第一部

ブローグ

一九四二年（昭和十七年）六月三日（アメリカ時間六月二日、以下日本時間を使用する）、ジョン・フォードは、北緯二十八度のミッドウェーにいた。

ジョン・フォードは、防空壕の入り口に据えつけた三十五ミリカメラの、テストに没頭していた。

「ねえ、ボス……」

と、擬装用のヤシの葉を防空壕の屋根に並べながら、助手のウィリーが言った。ミッドウェーは、不毛の島なので、わざわざ、ハワイから運んで来たものであった。

「こんなに、準備して、JAPのやつは、本当に、やって来るんですかねえ」

「うむ、来るさ」

と、フォードは答えた。

「少なくとも四隻、多ければ六隻の航空母艦と、数隻の戦艦を含む百二十隻の艦隊が、この島をめざしているんだ」

「空母……。するてえと、空襲ですな」

ウィリーは、空を仰いだ。

断雲があつたが、陽ざしは強かった。

「ねえ、ボス……。その空襲に来る、JAPの飛行機を撮ろうてんですかい」

「違う……。空中戦闘を撮るんだ。アメリカの戦闘機が、日本の爆撃機を墜とすところを撮るんだ」

「だったら、いっそのこと、アメリカの爆撃機が、日本の空母を沈めるところを撮ったらどうです？ その方が、ぐっと景気がいいや……」

「うむ……」

フォードは、ぐっとつまつた後、

「爆撃機に乗せてくれと頼んだんだが、二座だから、カメラマンは無理だというんだ。それで、この島の雷撃機隊長ヘンダーソン少佐に頼んで、ハミリを回してもらうことにした。リックという偵察員がやってくれるはずだ。フォートレス(B17)爆撃機の偵察員にも頼んであるんだ」

「ボスに乗せてくれればいいのにな、折角、海軍を志願したんだからな」

「搭乗員以外はだめだとき。海軍は、映画の宣伝価値を知らん。戦闘の厳しさを国民に示さなければ、税金も国債も集まらんぞ」

そう語っている所へ、海軍のミッドウェー基地指揮官、シリル・シマード中佐が視察に現われた。ジョン・フォードは、白いヘルメットのヘリに二本指をあてて、敬礼した。彼は志願による海軍大尉であり、軍人らしくふるまうことに充足を感じていた。

「リューティナント・フォード……」

と、シマード中佐は呼びかけた。

「その半ズボンは長ズボンに変えた方がよい。真珠湾の経験によると、長袖、長ズボンの方が、空襲の場合、被害が少ないことが立証されているんだ。それに……」

と、一息ついた後、シマードは言った。

「君をここで殺すわけにはいかん。アメリカの映画ファンから恨まれるからな」

「まったくですよ、中佐。こんな小さな島なんか、どうだっていい、うちのボスを死なせるわけにゃいきませんからねえ」

と、ウイリーが言った。

「馬鹿なことを言うな！」

と中佐が一喝した。

「この島をとられてみろ！ 日本兵が上がって来て、我々はみな、これだ」

彼は、のどぶえをカットするしぐさを見せて、

「ジョン・フォードは、ヒロヒトの前で、見世物にされるぞ」

と言った。

「ところで、中佐……」

と、フォードは尋ねた。

「JAPの空母は、本当にこの島に来るんでしょうね」

「うむ、パールハーバーの司令部は、数日前、ミッドウェー通信部に、『もっとパイナップルを送れ』と、平文で打電させた。すると、二日後、日本の軍令部では、暗号で、『AFには新鮮なフルーツが不足している』という情報を、西部太平洋で行動中の、ヤマモトに打電した。

AFというのは、ミッドウェーのことだ。そして、敵は、Dデイに、この島に上陸するつもりだ」

「Dデイというのは、いつですか？」

「さあ、六月初めだろう。そこまではわからん。もっとも、ヤマモトも、わが軍のパイナップルが、爆弾を意味することには、気づいていまいよ」

シマード中佐は、そう言い捨てると、ジープで立ち去った。

映画監督、ジョン・フォードは、このとき、四十七歳であった。

アイルランド移民の子として、アメリカ東部で生まれ、本名は、シーン・オフイニーと言った。一九二四年、処女作「アイアン・ホース」を二十九歳で発表。一九三五年、アイルランド独立運動を描いた「男の敵」で、監督としての地位を確立した。

そして、一九三九年には、同じアイルランド系の大男、ジョン・ウェインを使って、名作「駅馬車」を作り出し、一躍、スターダムにのしあがった。

その後「怒りの葡萄」「タバコ・ロード」も好評で、太平洋戦争の始まった四一年には、「わが谷は緑なりき」で、アカデミー作品賞と、監督賞を受けた。

しかし、戦争が始まると、彼はじっとしておれなくなった。真珠湾空襲のとき、なぜハワイにいなかったのか、と嘆いた。彼は、硝煙のなかに生きる男だった。実弾のとんで来るなかで、カメラを回してみたい、というのが、このアイルランド男児の願望であった。ついに、海軍に志願し、大尉として情報記録班に採用された。ハワイの艦隊司令部は、暗号解読により、日本軍のミッドウェー攻撃を察知した。そして、すぐれた戦争映画を作らせるため、ジョン・フォードの撮影隊を派遣した。フォードにとっては、一つのチャンスであったが、アメリカ海軍が、フォードを派遣する余裕があったということは、日本の機動部隊にとって、暗い運命を予想さ

せるものと言えよう。

フォードは喜んだが、見送りのとき残念がったアイルランドの男が二人いた。一人は「男の敵」に主演した、ビクター・マクラグレンで、いま一人は、「駄馬車」のスター、ジョン・ウェインであった。

「監督！ 今度は、あっしらの役はないんですかい？」

と、三十四歳のジョン・ウェインが訊いた。

「陸軍でも志願するんだな。砲兵隊で、背の高い男を探しているそうだと、フォードは微笑しながら答えた。

一

空母四隻を中心とする日本海軍の機動部隊は、六月三日（日本時間）朝、ミッドウェーの北西六百マイル（千百十キロ）海の一マイルは一・八五キロの地点に達していた。

六月五日が攻撃予定日であるから、そろそろ南東に向けて変針する頃である。艦隊は早朝から、濃い霧に包まれていた。

ジョン・フォードが、ミッドウェーの砂地で、カメラの取り付け、テストを行っていた頃、

機動部隊の旗艦赤城のガンルーム（士官次室＝青年士官のサロン）で、ハーモニカの手入れをしている若い士官があった。色が浅黒く、鬚の濃い男で、ケブガン（ガンルームの長）である芝山末男中尉（海兵六十八期、筆者の同期生）であった。みかけによらず、東京生まれの彼は音楽や映画にくわしく、兵学校生徒のなかでは、よくいえば文化的、早くいえば軟派に属した。

ハーモニカの手入れをしている芝山のかたわらに、水無月島郵便局長の小高助正が近づいて、「甲板士官、一曲聞かせてくれんですか」

と、笑い顔をみせた。

芝山は甲板士官で、平時は、副長に直属して、艦内の軍紀風紀の取締り、整備整頓を監視することが職務であった。戦闘時は、中部応急指揮官として、副長、運用長の指令のもとに、応急（防火、防水、被害局限）という重要な任務を帯びることになっていた。

小高郵便局長は、軍人ではなく、内地の三等郵便局長であった。ミッドウェーは、日本軍の占領後、水無月島と名前を変える予定であった。ミッドウェーを日本軍が占領することは、日本軍の間でも、関係ある民間人の間でも「既定」の事実になっていた。それは、アメリカ海軍の一部でも、そのように信じられつつあった。ニミッツの司令部と、米機動部隊の乗員を除いては……。

小高郵便局長は、かたわらで休息している艦攻（艦上攻撃機＝魚雷攻撃または、水平爆撃を主体

とする。操縦員の後藤仁一大尉（海兵六十六期）に向かって言った。

「ねえ、飛行士。なぜ、真珠湾をば占領せんのでしょうかねえ。こげんミッドウェーのような、こまかい島をば、とるより、その方が早決まりでしょうがね」

「さあ、ミッドウェーは、えさで、これで敵の主力艦隊を釣り出して叩いた後、真珠湾上陸となるのかな。作戦のことはわからん」

後藤はものうげに答えた。真珠湾、印度洋と勝つ戦ばかりやって来たので、戦闘の見通しについて説明するのは、わずらわしかった。

芝山がハーモニカをかかえこむようにして大きくベースを入れながら、デザートキャラバンを吹き始めたとき、郵便局長が言った。

「島へ上がると、忙しくなりますな。艦隊が内地を出るとき、次の手紙の宛先はどこか、と訊かれて、ミッドウェーじゃ、いや、水無月島に送ってくれ、と言っていた兵隊も多かったと言いますからな。占領と同時に、どかんと、祝電や、慰問袋が届くことでしょうが……」

二、三曲吹くと、芝山はハーモニカをしまって、立ち上がった。軽い不安と、不吉な期待が彼の胸の奥にあった。

赤城のガランルームは、第一中甲板左舷で、艦橋のすぐ前にあった。その前には士官室、機関科事務室があり、うしろには士官バス（浴室）、医務室、病室などがあり、そのうしろは、下段

格納庫になっている。

赤城の格納庫は三段になっており、ガントリーのすぐ上が中段格納庫、その上が上段格納庫、さらにその上は、飛行甲板になっていた。芝山は、下方に向かって、ラッタル（梯子）を降りた。三万五千トンの赤城は、元来高速戦艦として設計された艦で、第一中甲板の下が、四十ミリの厚い装甲板（ばんばん）になっていた。これが戦艦の防禦甲板に当たるわけである。

運用長、土橋豪実中佐の発案で、赤城の応急担当の幹部は、内地を出港するとき、艦底に近いマンホールを全部点検し、ついでに、艦底のビルジ（水あか）の深さも計測した。四十ミリの装甲板があるので、敵の爆弾も、これの貫徹は困難であろう。しからば、もっとも警戒を要するのは、側面からの魚雷の被害である。それには、マンホールや、防水扉の閉鎖を嚴重にして、被弾時の浸水を最少限度に止めなければならない。そう考えて、運用長は、応急担当の芝山らをひきいてうすぐらい艦底を回ったのであった。

今、芝山は、予想される合戦を前にして、小さな不安を感じていた。赤城に命中するのは敵の魚雷だろうか。飛行甲板や、格納庫の防禦は考えなくてもよいのだろうか。そして、彼は一つの想いを秘めていた。本艦に乗り組んでいる六十八期生は、彼一人である。六十五期の根岸大尉や、六十六期の後藤大尉は、パイロットであるから、またも武勲を立てるわけであるが、中部応急指揮官としては、敵弾が命中しなければ、腕のふるいようがない。しかし、赤城に敵

弾が何発も当たって、おれが忙しいようでは、戦局が思いやられる。若い芝山中尉は、一つのジレンマに陥りながら、再びラッタルを登り始めていた。

二

六月三日朝機動部隊は、針路七十度（東北東）で、ミッドウェーの北方に向けて航行していた。攻撃予定によれば、三日の朝十時頃、ミッドウェーに向けて変針し、島に接近して、距離二百マイル（三百七十キロ）のところで、陸上攻撃隊を發進させる必要があった。

赤城の艦橋では、第一航空艦隊參謀長の草鹿竜之介少将が、しきりに迷っていた。ミッドウェー島を攻略するには、予定通り、六月五日の早朝、午前一時半に、攻撃隊を發進させなければならぬ。しかし、内地を出て以来、杳として消息の知れないのは、敵の空母部隊である。

——わが機動部隊は、島の攻略と、空母の決戦という、両様の任務を背負わされている——草鹿は、軽く眉をしかめた。それが出来ない機動部隊ではなかった。しかし、さしあたっての問題は、濃霧で、加賀、飛竜、蒼竜の空母をはじめ、一艦も他の部隊が見えぬことであった。予定通り、ミッドウェーに変針するならば、各艦にその旨を知らせないと、衝突その他の事故を起こしかねない。